

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 1 日現在

機関番号：45311

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2017

課題番号：26590170

研究課題名(和文) 新任保育者のメンタルヘルス対策の構築に関する研究

研究課題名(英文) A Study on Implementation of Mental Health Protection Method for New Childcare Workers

研究代表者

加藤 由美 (KATO, YUMI)

新見公立短期大学・その他部局等・講師(移行)

研究者番号：70509629

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：新任保育者の心理社会的ストレスの予防を目的として作成した心理教育“サクセフル・セルフ”新任保育者版を用いた介入研究では、参加者(87名)の多くが今後の生活に役立つ等と評価し、プログラムへの参加により心理社会的要因に肯定的な変化が見られる可能性が示唆された。また、新任保育者が困難感を抱えやすい職務上の人間関係に関するアンケート調査では、保育者(214名)の困難事例の内容を質的に分析した。以上の研究成果を、著書「保育者のためのメンタルヘルス」として出版した。

研究成果の概要(英文)： In the intervention study with the use of Psychology Education “Successful Self” for new childcare workers, which was created in order to protect new childcare workers from psychosocial stress, many of the 87 participants evaluated this protection program helpful in their occupational life, and participation in this program was found possible to make positive change in psychosocial factors. Also in the questionnaire on occupational human relationships, where new childcare workers often find it difficult, we qualitatively analyzed the contents of difficult cases of 214 childcare workers. We have published the data analyses in the book titled “Mental Health for Childcare Workers.”

研究分野：臨床心理学

キーワード：新任保育者 メンタルヘルス 心理教育 困難事例 介入

1. 研究開始当初の背景

(1) 子どもの健全な成長のために、保育者（幼稚園教諭や保育士）のメンタルヘルスは重要である。しかし、保育者の勤務環境は年々厳しくなっており、特に新任保育者は、多くの困難感を抱えやすいため、他の年代よりも心の疲労度やバーンアウトに陥る危険性が高く、早期離職の問題が懸念されている。

(2) 新任保育者のメンタルヘルスの問題に取り組むことは急務であると考えられるが、実際の保育現場は職員のメンタルヘルスに対するサポート体制が整っておらず、その困難さへの具体的な対処や支援に関する実践報告はほとんどみられない状況にある。

2. 研究の目的

(1) 新任保育者の心理社会的ストレスの予防とメンタルヘルスの保持・増進を目的とした心理教育プログラム“サクセスフル・セルフ” 新任保育者版を新たに作成、実施し、その内容や方法が適切であるかどうかを検討する。

(2) 新任保育者が特に困難感を抱え易い職務上の人間関係の問題を詳細に把握するために、保育者を対象とした質問紙調査を実施する。具体的な困難事例を明らかにすることで、心理教育プログラムの内容に反映させるとともに、園における新任保育者への支援のあり方を考えるための一助とする。

(1)(2) の実施により、新任保育者のメンタルヘルス対策の構築に向けて、幼稚園や保育所、認定こども園等の保育現場で新任保育者への支援に役立つ内容を提案する。

3. 研究の方法

(1) 新任保育者の心理社会的ストレスを予防するための心理教育プログラムを新たに作成するにあたっては、既に大学生や研修医等の心理社会的ストレスの予防が報告されている“サクセスフル・セルフ”（安藤、2012）の実践を基盤とし、国内の先行研究の概要（加藤・安藤、2012）や新任保育者の困難感に関する調査結果（加藤・安藤、2013）を踏まえた内容とした。

(2) 作成したプログラムを保育者を対象とした研修 A、B にて実施した。A は、2014 年 8 月、保育者 75 名を対象として実施した。B は、2015 年 3 月～6 月（月 1 回）保育者 12 名を介入群、7 名を統制群として実施した。A、B 共に参加者によるアンケート調査をもとに、心理教育プログラムの評価を行い、内容・実施方法等を検討した。また、B では、介入群と統制群、プログラムの全参加者群と一部参加者群において、心理社会的要因に差があるかどうかを比較検討すると共に、介入群の各分析対象者の前後の評価指標得点の変化に

についても個別に検討した。

(3) 2014～2015 年に、保育者を対象として、職務上の人間関係の問題に関する質問紙調査を実施した。質問内容は、「子どもや保護者への対応、職員間の人間関係において最も困難さを感じる状況」であり、自由記述で回答を求めた。

4. 研究成果

(1) 新たに作成した心理教育プログラムは、「自己理解・目標設定」「問題解決：基礎編」「問題解決：応用編」「ストレスマネジメント」の 4 レッスンで構成された。本プログラムを研修 A、B にて実施した結果は以下のとおりである。

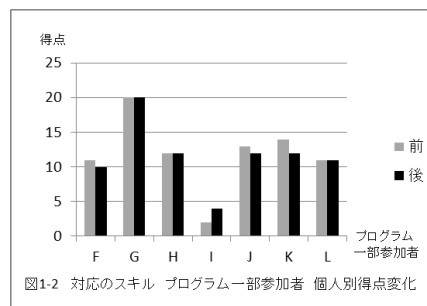
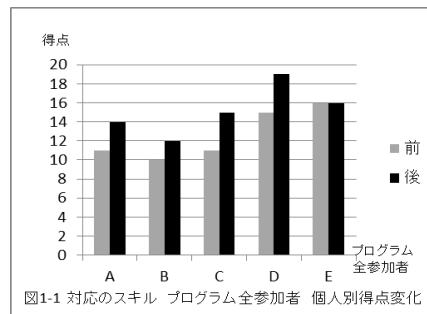
【研修 A】

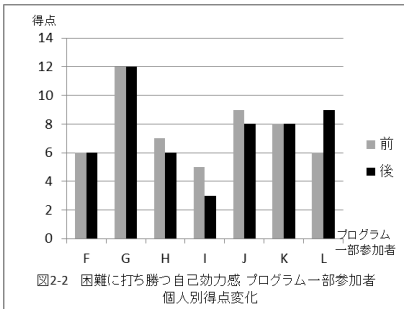
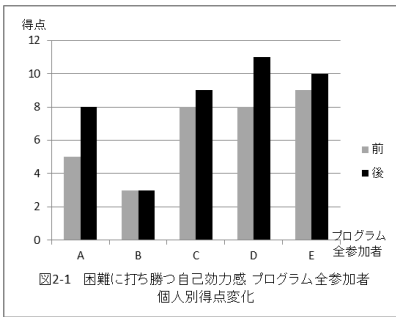
8 割を超える参加者が、内容を理解し、わかり易いと感じ、今後の生活に役立つ印象をもったことが窺えた。レッスンの感想として、「今後への意欲が高まった」「良かった」「他の人の意見が参考になった」「振り返りができた」という内容が見られた。また、研修に参加した感想として、「他の人の意見が参考になった」「今後への意欲が高まった」等、肯定的な内容が多く見られた。

【研修 B】

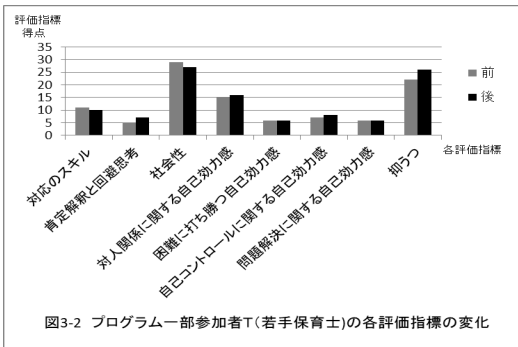
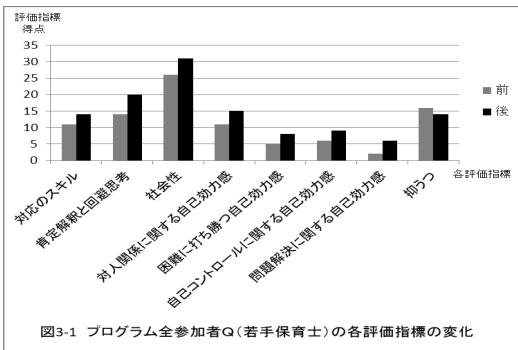
参加者の感想から、本プログラムへの参加は保育者にとって仕事に対する自身の考え方や姿勢を振り返る有意義な機会となったことが窺えた。

次に、介入群と統制群において「対応のスキル」「社会性」「対人関係に関する自己効力感」「抑うつ」等の心理社会的要因のプログラム前後の変化を検討したところ、有意な変化は認められなかった。しかし、プログラムの全参加者（図 1-1、2-1）は、一部参加者（図 1-2、2-2）に比べて、「対応のスキル」や「困難に打ち勝つ自己効力感」といった評価指標において得点の増加が多く見られた。





また、個人別の評価指標の変化を調べたところ、全参加者（図 3-1）では、一部参加者（図 3-2）に比べてプラスの変化が多く認められた。このことから、4 回のプログラムに参加することにより、心理社会的要因に肯定的な変化が見られる可能性が示唆された。



(2) 職務上の人間関係の問題に関する質問紙調査に回答した保育士 137 名、幼稚園教諭 77 名（計 214 名）の記述内容を、「子どもへの対応における困難感」「保護者への対応における困難感」「職員間の人間関係における困難感」について、KJ 法により回答内容別にカテゴリーを生成し、経験年数 5 年未満と 5 年以上に分けて回答数を示した（表 1～3 は保育士。表 4～6 は幼稚園教諭）。その結果、

保育士で最も記述内容が多かったのは「保護者への対応における困難感」で、約 9 割から回答があった。内容分析の結果、「子ども同士のトラブルの伝え方・謝罪の仕方」「子どもの気になる様子の伝え方」等 11 のカテゴリーが生成され、「保護者への伝え方の困難」「保護者との連携の困難」という 2 つがコアとして位置づけられた。次に記述が多かったのは「職員間の人間関係における困難感」で、「職員への話し方」「保育観や保育方法の相違」等 6 のカテゴリーが生成された。これらは「職員間の連携の困難」というコアカテゴリーにまとめられた。「子どもへの対応における困難感」では、「落ち着きがない子ども」「気になる子ども」等 8 のカテゴリーが生成され、「気になる子どもへの対応の困難」「保育方法の困難」「子ども同士のトラブルへの対応の困難」という 3 つがコアとして位置づけられた。

保育士の人間関係における困難感（表 1～3）

表1 子どもへの対応における困難感(N=58)

コアカテゴリー	カテゴリー	経験年数 5年未満 (N=34)	経験年数 5年以上 (N=24)
気になる子どもへの対応の困難	落ち着きがない(自己コントロールが困難な)子ども	11	2
	気になる子ども	2	7
保育方法の困難	食事方法	6	2
	保育方法	5	2
	理想と現実の保育の相違	2	1
	子ども理解	2	3
子ども同士のトラブルへの対応の困難	喧嘩をする子ども	4	2
	かみつきをする子ども	2	7

表2 保護者への対応における困難感(N=122)

コアカテゴリー	カテゴリー	経験年数 5年未満 (N=47)	経験年数 5年以上 (N=75)
保護者への伝え方の困難	子ども同士のトラブルの伝え方・謝罪の仕方	11	11
	クレームへの対応	5	5
	子どもの気になる様子の伝え方	10	17
保護者との連携の困難	伝達方法	2	2
	子育てに問題がある保護者への対応	10	8
	専門的な対応の必要性	4	2
	保護者の理解を得る	3	5
	保護者へのサポートの必要性	3	4
	保育観の相違	2	8
	園に協力的でない保護者への対応	1	7
	意思疎通の問題	1	6

表3 職員間の人間関係における困難感(N=94)

コアカテゴリー	カテゴリー	経験年数 5年未満 (N=42)	経験年数 5年以上 (N=52)
職員間の連携の困難	職員への話し方	13	14
	保育観や保育方法の相違	9	19
	職員間の連携不足	8	10
	職員間の人間関係	8	4
	世代間の相違	2	3
	知識不足	2	2

幼稚園教諭で最も記述内容が多かったのは「職員間の人間関係における困難感」で、約9割から回答があった。内容分析の結果、「職員間の人間関係」「指導方法の相違」等8のカテゴリーが生成され、これらは「職員間の連携の困難」というコアカテゴリーにまとめられた。次に記述が多かったのは、「保護者への対応における困難感」で、「子ども同士のトラブルの伝え方・謝罪の仕方」「クレームへの対応」等11のカテゴリーが生成され、「保護者への伝え方の困難」「保護者との連携の困難」という2つがコアとして位置づけられた。「子どもへの対応における困難感」では、「気になる子ども」「トラブルの対処方法」等4のカテゴリーが生成され、「子どもへの対応の困難」「保育方法の困難」の2つがコアとして位置づけられた。

幼稚園教諭の人間関係における困難感(表4~6)

表4 子どもへの対応における困難感(N=26)

コアカテゴリー	カテゴリー	経験年数 5年未満 (N=17)	経験年数 5年以上 (N=9)
子どもへの 対応の 困難	気になる子ども	10	5
	トラブルの対処方法	8	
保育方法 の困難	保育方法	5	2
	食事方法		2

表5 保護者への対応における困難感(N=55)

コアカテゴリー	カテゴリー	経験年数 5年未満 (N=22)	経験年数 5年以上 (N=33)
保護者への 伝え方の 困難	子ども同士のトラブルの伝え方・ 謝罪の仕方	8	6
	クレームへの対応	4	9
	子どもの気になる様子の伝え方	2	5
	伝達方法	1	5
	子どもの言うことをすべて信じる 保護者への対応	2	2
	保護者間のトラブル		1
保護者との 連携の 困難	保護者に理解を得る	2	1
	園に協力的でない保護者への対応	1	1
	意思疎通の問題	1	1
	保育観の相違		2
	経験不足	1	

表6 職員間の人間関係における困難感(N=72)

コアカテゴリー	カテゴリー	経験年数 5年未満 (N=30)	経験年数 5年以上 (N=42)
職員間の 連携の 困難	職員間の人間関係	14	10
	指導方法の相違	5	12
	保育観や保育に対する考え方の相違	3	8
	上司の対応	3	5
	職場のシステム	3	1
	職員間の連携不足	1	2
	世代間の相違	1	2
	パワーハラスメント		2

以上のことから、経験の浅い保育士は、保育経験が少ないために子どもの食事等の保育方法に関して困難感を抱えやすいのではないかと推察された。また経験のある保育士は保護者対応の機会が多いため、保護者のクレームへの対応や連携に関して困難感を抱えやすいので

はないかと推察された。保護者や職員への話し方の困難感は、両者に共通して見られた。また、幼稚園教諭の多くが経験年数に関わらず、職員間の人間関係、指導方法や保育観の相違といった職員間の連携に困難感を抱えていると推察された。また、子どもへの対応よりも保護者対応の困難感に関する記述が多く見られ、子どもの気になる様子やトラブルを保護者へどう伝えるかに困難感を抱えている幼稚園教諭が多いことが窺えた。

(3) (1)(2)の研究成果をまとめ、保育現場に勤務する保育者(園長、主任等)や新任・若手保育者向けに、著書「保育者のためのメンタルヘルス」として出版した。主な内容は、以下のとおりである。第1章：若手保育者の抱える困難感やメンタルヘルスに関する先行研究の概観、第2章：若手保育者の抱える困難感に関するインタビュー調査等の質的研究の報告、第3章：保育者の困難感と抑うつに関連する要因に関する量的研究の報告、第4章：保育者を対象とした心理教育“サクセスフル・セルフ”の実践研究の報告、第5章：保育者の職務上の人間関係に関する困難事例の紹介、第6章：保育者のメンタルヘルスの保持・増進に向けて。保育者のストレスの多くは職場の人間関係に起因するという現状を踏まえ、特に第5章においては、職員間の連携の困難として、全140事例(保育観や保育方法の相違による困難事例、職員間の連携不足による困難事例、職員への話し方や指導方法の困難事例、上司の対応による困難事例、世代間の相違による困難事例、職員同士の人間関係の困難事例)を掲載し、園内での職員研修等で活用しやすいよう工夫した。

<引用文献>

安藤 美華代、自己理解を深め人間関係力を育む心理教育“サクセスフル・セルフ”、岡山大学出版会、2012、125
 加藤 由美・安藤 美華代、新任保育者の抱える困難に関する研究の動向と展望、岡山大学大学院教育学研究科研究収録、151巻、2012、23-32
 加藤 由美・安藤 美華代、新任保育者の抱える困難 語りの質的検討、兵庫教育大学大学院連合学校教育研究科教育実践学論集 14巻、2013、27-38

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

加藤 由美・安藤 美華代、保育士の抑うつに関連する要因の検討 経験年数、首尾一貫感覚、対処スキルに着目して、保育学研究、査読有、54巻1号、2016、54-66

<http://doi.org/10.20617/reccej.54.1>

54

加藤 由美、若手保育者の困難感と対処に着目した心理教育的介入 元保育者による保育者のメンタルヘルスに関する研究、教育実践学論集、査読無、創立20周年記念特別号、2016、57-64

repository.hyogo-u.ac.jp/dspace/handle/10132/17167

加藤 由美・安藤 美華代、保育者のメンタルヘルスに関する国内外の研究の動向と展望 学校教員を対象とした研究を参考に、岡山大学大学院教育学研究科研究収録、査読無、159巻、2015、1-10
ci.nii.ac.jp/naid/120005649249

加藤 由美・安藤 美華代、新任保育者の心理社会的ストレスを予防するための心理教育“サクセスフル・セルフ”のプロセス評価研究、岡山大学大学院教育学研究科研究収録、査読無、160巻、2015、1-10

<http://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/53827>

〔学会発表〕(計4件)

加藤 由美・安藤 美華代、幼稚園教諭の人間関係における困難感、日本保育学会、2016

加藤 由美・安藤 美華代、保育士の人間関係における困難感、日本保育学会、2015

加藤 由美・安藤 美華代、保育者のための心理教育“サクセスフル・セルフ”保育者版の実施およびプロセス評価、日本心理臨床学会、2015

加藤 由美・安藤 美華代、新任保育者のための心理教育“サクセスフル・セルフ”新任保育者版の試行的実施およびプロセス評価、日本心理臨床学会、2014

〔図書〕(計1件)

加藤 由美、福村出版、保育者のためのメンタルヘルス 困難事例から考える若手保育者への心理教育的支援、2018、231

〔その他〕(計1件)

加藤 由美、若手保育者の困難感と対処に着目した心理教育的介入に関する研究、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士論文、2016、163

DOI

: <http://hdl.handle.net/10132/17090>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 由美 (KATO, Yumi)

新見公立短期大学・幼児教育学科・講師

研究者番号：70509629

(2) 研究分担者

安藤 美華代 (ANDO, Mikayo)

岡山大学・教育学研究科・教授

研究者番号：60436673